

ご主人様、大好き

青輝 ひづき

1

布団の中で身じろぎする影。その影響を受けて小さな風が起こり、カーテンをほんの僅か揺らす。生まれた隙間から入った朝の日光が、ベッドの上で踊る。

「んあ」

身じろぎした影の頭の部分に光が架かり、照らされた対象がくぐもつた声を漏らす。

でもそれだけ。しばらくの間、部屋の中は先程までのやわらかな静寂が占める。

十秒、二十秒、三十秒……。

もうすぐで時計の秒針が一周する、といったところでようやく布団に包まれた影が再び動きをみせた。

随分幅の広い布団からベッドの頭頂部にある目覚まし時計へと、頼りなさに腕が伸ばされる。幾度か空振りを繰り返して、ようやく時計をその手に掴むと、出た時と同じようにのろのろと布団の中へ戻っていった。

十秒、二十秒、三十秒……。

「わ、わわわ、わ、わあっ！」

掛布団の片半分が大きく跳ね上げられる。部屋の空気

に晒されたベッドの上には長く真つ白な髪を余すところなく前衛的にコーディネートしている（好意的表現）少女。

その小柄な少女は、両手で握り締めている時計の針をじっと見つめていた。

「は、はちじ、じゅうさんぶん、さんじゅうにびょう……」

ぶるぶると震える目覚まし時計、ではなく少女の手。

「寝坊です……」

白い肌、細い眉、薄桃色の唇という、全体的に淡彩な面差しのなかで、そこだけ真紅に輝く少女の瞳がせわしく揺れる。

「寝坊ですよーっ!!」

ガバツと勢いよく跳ね起き、そのままの勢いでベッドから跳び下りた。時計は未だその右手に持っている。

「昨日うつかり目覚ましかけ忘れてしまいました！つていうか夢中になりすぎて、いつの間にか眠っちゃってましたっ?！」

混乱醒め遣らぬよう、誰に求められたわけでもないのに寝坊した理由を説明し始めた少女。意味もなくぐるぐると寝室の中を歩き回る。相変わらずその右手には時計。

「どうしまししょう、どうしまししょう……」

もう一度手元の時計の時刻に目を向ける。無論八時十

三分三十二秒などではなく

「ひえ、もう十五分?! 大変です、ただでさえ大変だったのに、もっと大変になってしまいましたあ! と、とにかく着替えを、いえ朝食の準備、いやそれよりもまず……」

焦りで思考が空回りし、ぶんぶんと手に持った時計を振り回す少女。

もう永遠に続くのではと思わせるような三文芝居を終わらせたのは、

カサリ

という小さな小さな摩擦音だった。少女の片耳がピクリと動く。

混乱状態でも、彼女の耳はその音をはっきりと聞き取った。耳のよさは、彼女が彼女である証のひとつなのだから。その音の元が、彼女が彼女であるもつとも大切な理由ならばなおさらである。

少女は音のした方、自分が眠っていた大きなベッドの方へと体を向ける。その動作に、先程までの焦りの様子は見受けられない。ゆっくりとベッドに近づいていく。

途中でカーテンを開け、目覚まし時計を枕元へと戻す。

そして目覚まし時計を置いた右手で、片半分だけ捲れていた掛け布団を握った。そのままやんわりと残った半分の部分を捲る。

そこには黒髪の少年が心地よさそうに眠っていた。歳

の頃は高校生が大学生くらい。少年を見下ろす少女より少し年上のように見える。布団を探しているのだろうか、手ももぞもぞときこちなく動いている。

その様子に少女はつい笑みをこぼし、仰向けの体をやさしく揺らす。

ゆさゆさ、ゆさゆさ。

「ん、ん、ううん……」

呻く少年。なかなか起きようとしませんが、少女はなおもゆっくりと揺らし続ける。

「ほら、起きてください」

布団を全て剥ぎ取ってしまえばもつとすばやく簡単に起こすこともできようが、少女にそういった強引な行動に出る様子は見られない。あくまでもやさしく、労りをもつて。さながら赤子をあやす母親のようだった。

「ん……はあ、あ」

揺られ始めてしばらく。ようやく少年の双眸が少し開く。少女は少年の体を揺らしていた両腕を止め、今度は黒髪の頭を左から包み込むように白い手で覆った。半開きの少年の眼を見つめるため、顔も互いの息がかりそうなほど近くまでもつていく。滴り落ちるように滑らかに垂れた長い白髪が、少年の黒髪とコントラストを描き出す。

「起きましたか？」

その表情は自然でやわらかな微笑み。なかなか目を覚

まさなかつた少年を責めようとする様子は微塵も感じられない。

「……ああ、エト、か。おはような」

少し掠れた声で少年が言葉を口にする。声に合わせるように、その両目もしっかりと見開かれる。瞳の色は髪の毛と同じ漆黒、虹彩は茶褐色だった。

エトと呼ばれた少女はさらに顔を近づけ、言葉を返す代わりに触れるか触れないかぐらいの軽い口づけをした。小鳥がついばむようなささやかなキス。少年のほうも少し目を見張ったくらいで、特に不満を漏らしたりはしない。

少年の瞳の焦点に合わせるように、エトはゆっくりと顔を遠ざけていく。ちょうど頭一つ分くらいの間を置いて、真紅と漆黒の眼が見つめ合った。

少女の顔は温容という言葉がぴったりな、温かな笑顔で彩られている。心の底から今の幸せを実感している者にしかできない相貌だった。

その薄桃色の唇から言の葉が紡がれる。

「はい。おはようございます、ご主人様」

「起きて早速ですが、ご主人様にひとつ悪いニュースをお伝えしなければなりません」

エトは妙にかしこまった口調でそう告げた。と同時に

わざとらしく視線を逸らす。その姿にはどこかおどけた雰囲気を感じられる。

「……何？」

生真面目な顔を無理して作ったようなエトの横顔をじつと見つめながら、彼女のご主人様であるところの少年は続く言葉を待つ。

十分にためを作ってから、再びエトは少年と目を合わせた。

「ごめんなさい、寝坊しちゃいました」

同時に真つ赤な舌がべろりと現れる。

エトの視線が少年を外れ、彼の頭の少し上の方まで移動した。それに合わせて少年も首を自分の後ろの方に巡らす。

二対の視線の先で、控えめな音で時を刻む目覚まし時計。その長針は少女が初めて時刻を確認した時よりもさらに大きく進んでいた。

「どう、しましょう……」

深刻な様子こそ見せていなかったものの、彼女にも多少は叱られる怯えがあった。寝過ごしたのはどうあつても自分の責任である。少年の気性からして、激しく叱責されるようなことはないだろうが、同時に全くのお咎めなしで済まされるとも思えない。

「そうか、寝坊したのか」

そう呟きながら少年は上半身を起こした。背後になつ

た少女の位置から表情を窺い知ることはできなかったが、その声の冷たさに温かだった心がざわつく。

「罰を受ける覚悟は出来てるの？」

小柄な少女の背中がビクッと震えた。声の暗さもさることながら、エトのほうに振り向いた少年の瞳に、ふざけた様子が一切なかったからである。相手を凝視し、その心の中まで余すところなく見透かすような、鋭くて寒々しい目だった。

「本当に、すみません……。こんなんじゃ、っ！」

先ほどの倍以上も大きく少女の肩が震える。少年の冷たい指が頬に当たっていた。

暖かな空気が冷え、凍る。

朝の穏やかな日差しが白々しい無機質な光に変わっていく。

「こんなんじゃ、何？」

「……ご主人様のメイド、失格です……」

とうとうエトは俯いてしまった。

カチコチと、本来は小さなはずの目覚まし時計の音が響く。それほどまでに辺りは静寂の帳に包まれていた。

空気は、重いというよりひたすらに寒かった。

ペチペチ。

そんなのんきな音がどこからか聞こえてきた。

ペチペチ。

まただ。私がこんなにも追い込まれているのに、なん

なんだ、この音は。

ペチペチ。

いい加減に　っ！

「いい加減顔上げなつて。エト、おーいエトさんやー」
そんな声に顔を上げた少女の目に映ったのは、苦笑気味に相手を崩している少年の姿だった。伸ばされている右腕を追っていくと、自分の頬を軽く叩いている手。

「……ご主人様？」

「そうそう。あなたのご主人様にして恋人の紅軌こうきさんですよー。何、エトさんの目には違うもんにも映ってるの？ そりゃ大変だ。眼科、いやエトの場合は獣医科かな。とにかくお医者さんのところに連れて行きます？」

先ほどの冷淡さはどこに吹き飛んでしまったのか。白髪少女の前に座っているのは、明るくて軽くて闊達かくだで、それでいて本当に大事なものは絶対に手離さない、そんな普段通りの少年だった。

「え、え、え？」

「どうした、鳩が豆鉄砲を食ったような顔して？」

苦笑から笑顔に変わった紅軌の顔は、穏やかそのものだった。

「え、え、だつて私、寝坊しちゃつて、そそれでご主人様の機嫌を損ねて、それでそれで、」

「ああ、そのこと。確かに本当に寝坊してるんなら、ちよつとくらい文句言つてたかも。でもほら、別に今朝寝

坊してないし」

「でも時間が、時間」

「ほらこれこれ」

そう言って紅軌は、枕もとの折りたたみ式携帯電話を未だ錯乱状態のエトにやや強引に握らせた。

幾度か携帯電話と少年の間で忙しなく動いた少女の視線が、しばらくして紅軌のところで固定された。

頷く少年。

エトは恐る恐る携帯電話を開けてみた。

「あ、ああ」

半開きの口を閉じることすら忘れてしまった。

携帯電話の液晶ディスプレイに表示された時刻は、目覚まし時計が示す時間より二時間近く遅い時点。

「……ということは……」

「そ、寝坊どころか、むしろいつもより早いくらい」

紅軌がからからと笑っている。

しかし、起きた直後から今に至るまで、様々な重圧を味わった少女にとっては笑い事では済まない。済ませられるはずがない。

さつきとは別の要因から、エトの肩が震え始める。

「……からかってたんですね……」

「ん？」

「面白がってたんですねっ！」

大きな声で感情を爆発させ、体当たり気味に少年の胸

に突っ込む。

「わわっ」

いきなりの突進にひるんだ紅軌は、そのままベッドの上に押し倒される。

「この、この、この！」

ぼこぼこ目目の前の胸板を両手で叩くエト。

全力で叩かれているわけではないのだが、決して楽な状態でもない。それでも紅軌はされるがままになっている。

「本当に、本当にあなたって人はっ」

なおも叩き続ける少女。下の少年は苦笑いを浮かべるばかり。

そんな状態を一分ほど続け、ようやくエトの思考にも

冷静さが戻ってきた。叩くのをやめる。

「もう。この次からはからかわないですぐに教えてくださいださいね！」

そう釘を刺してから顔を横に背けた。

紅軌のほうも「はいはい」と首をかくかく、反省の意思表示。

「それにしても、なんであんなに時計の針がずれていたんでしょう？ 電池切れで止まっているのならまだしも……」

少しでも長くこうして少年と触れ合っていたくて、大して気にもしていない疑問を口にする。

その問いに答える下の声。

「ああ、それな。その時計オレが昨日授業の復習に使ってたから。操作の単元って結構苦手だね」

途端にキツと横目で少年を睨むエト。紅軌は万歳のポーズでギブアップをアピール。

「ならちゃんと戻しておいてください。なんで昨日のうちに戻してくれなかったんですか？」

「……ああ、なぜか？ ううん、なぜ、か……」

普段快活な少年にしては珍しく言い淀んだ物言いをするので、引つ掛かった少女は紅軌の顔色を窺った。

だが、肝心の彼の顔は真横に背けられている。

ぼそぼそと独り言のように紅軌が呟いた。エトの人並みはずれた聴覚は、そんな少年の些細な掠れ声もはつきりと聞き取ってしまう。

「……夢中になりすぎて、いつの間にか寝てたからだよね……」

二人とも顔を真っ赤にして押し黙ったのだった。

瑤ようという友人が二人の家に寄ったとき、エトも紅軌も慌しく動き回ってる最中だった。

玄関のドアを開けたのはエト。来客の顔を確認すると、挨拶もそこそこに家の中に向かって呼びかける。

「ほらあ、瑤さん来ちゃいましたよー！ 早くしてくださいー！」

その声が聞こえたのか聞こえていないのか、奥から他のタオルないかー」という声が返ってくる。

呆れ半分の表情をしつつ、どこか嬉しそうな顔をしているエト。靴箱から男物の靴を取り出しながら、口では尋ねられたタオルの所在地を告げる。奥のほうでガタガタと騒々しい物音。

「どうしたの、朝から慌しいわね？」

家内の雰囲気は飲まれながらも、瑤は目の前でしゃがみ込んでいる、雪のように真っ白な髪を持つ少女に訊ねた。

戸棚口に引つ掛かってなかなか抜け切らない靴と格闘しているエトはすぐに答えられない。

ようやく完全に靴を引つ張り出して玄関に並べ、綺麗に揃えたところで一息。額に薄く浮かんだ汗を服の二の腕で拭きながら、やっと客人へと向き直った。

「すみません、お待たせしちゃって」

エトは困ったような笑顔で軽くお辞儀をする。瑤は気にしてないという風に手を振りつつ、続きを促した。

「で？」

「あ、はい。食後の紅茶を零しちゃったんですよ、ご主人様。零したというかぶちまけたというか……カップごとドーン、パリン、と」

「あら、紅軌にしては珍しい失態ね。学校外では優等生なのに」

「そうなんですよ。なんかうつかりしていたらしいです」
苦笑いのエト、ふうんと少し思案顔の瑠。

身体的特徴で言えば二人の少女は正反対と言っている。小柄で全体的に起伏の乏しい体型の白髪少女に比べ、瑠は同年代の男子と比べても遜色のない長身である。しかも出るところはしっかりと出ているメリハリの利いた魅力的な肢体。にも関わらずふくよかな印象を与えないのは、もはや芸術と称しても過言ではないよう。肩口まで伸びる髪は黒色だが、その色彩は薄く、夕日を背にすると紅蓮のように赤く輝いて見えることをエトは知っていた。

紅軌と同じ色合いの双眸が微かに揺れている。

「学校の疲れでも残ってるのかしら……」

「そうかもです。あ、そうだ！ 学校といえば、昨日の授業で何か苦手なところがあるって仰ってたんですけど？」

「昨日？ …… あーあーあー、昨日のね。くく、昨日のは凄かったわよー、ホント」

途端に瑠の肉感的な唇が悪戯っぽく吊り上がる。湧き上がる笑いの衝動を必死に抑えているのが容易にわかる。エトも興味津々といった具合に真紅の瞳を輝かせる。

「え、え？ そんな感じだったんです？」
そんな少女の乗り気な態度にさらに気をよくした瑠は、

「ずいっとエトのすぐ近くまで顔を寄せた。内緒話でもするかのようになり、そつと声を出す。」

「それが聞いてよエトちゃん。紅軌ってば」

バタン、と家の奥の方からドアの閉まる音が聞こえた。二人がそれぞれに目を向けると、そこでは話題の人物が学生靴を小脇に抱えて玄関に歩いてくるところだった。空いている方の手で客人に挨拶をする。

「瑠さん、おはよう」

それに答えるように黒髪の少女も手を振り返す。しかしエトとの距離はそのまま。

二人の少女の不自然な距離の近さに疑問を抱いた紅軌が言葉を続ける。

「どうしたの、二人とも？」

その言葉を待ってましたとばかりに、突然瑠は芝居がかった口調で話し始めた。

「それがですねえ、紅軌の旦那。こちらにいらっしやるエト嬢が昨日の旦那の武勇伝を是非聞きたいと、そつおつしやりました。不肖私めが、拙いながらもその一端を説明してさしあげようと、そう思った次第でございます」
会話に引き出されたエト本人は黙って事態の推移を見守っている。

「……武勇伝？」

「そう、武勇伝」

「いまいちおもしろい反応が返ってこなかったからか、

それともただ単に面倒になっただけか。すぐに瑶の口調は平時のそれへと戻った。

「聞いてよエトちゃん。昨日の操作の授業の時紅軌ったら台車を動かしてる最中に、あろうことが、くしゃみなんかしてくれちゃってね。いやもう、わざとやったんじゃないかってくらいいいタイミングだったわ」

そのときの情景を回想しているのか、長身の少女は笑いに目を細めている。

それとは対照的に、激しい焦燥に見舞われる少年。

「でね、それこそコントみたい台車のコントロール誤って。そのまま近くにあった薬品棚にゴチン。ごちゃごちゃに混ざり合った薬品の化学反応で起こった爆発が、なんと実習室を半か」

「あーあーあー！」

少女の声を掻き消すように、紅軌は大声で叫んだ。

ついですぐに玄関に出された靴を履いて外に出ようとする。その左手は瑶の腕を取り、強引に外へと引っ張っていく。

「ちよ、ちよっと！ まだエトちゃんへの話は」

「うるさいうるさい！ さっさとする！ ほら、早くしないと学校遅れるって。エト、行ってくるから。それじゃ、いつてきまーす！」

「いた、いたた！ 引っ張りすぎ、ちよっと紅軌引っ張り過ぎだつて！ わわ、危な危な。つとと、とりあえず、

い行ってくるね、エトちゃん！ またね！」

ガチャン、バタン。

大きな音を立てて玄関のドアが閉まった。男女二人の喧騒が徐々に遠ざかっていく。さながら台風が過ぎ去る時のようだった。

独り家に残されたエトはしばらくの間呆然としていたが、やがて氷が融けるようにゆっくりと表情が動いていった。

出来上がった表情は、恋人を起こしたときと同じ、慈愛に満ちたやさしい微笑み。

「はい。いつてらっしゃいませ、ご主人様」

紅軌が出て行ったドアに向かって、深く一礼をした。純白の髪をさらさらとなびかせるその姿は、一枚の絵画のように優美で風雅な様子だった。

「さて」

ゆっくりとした動きで顔を上げたエトは一言呟き、体を家の中へと向けた。

「お仕事に取り掛かりましょうか。なんだか今日はとても調子がいいです。ひよつとして」

「よつか？ 昨晚ご主人様に元気を分けていただいたからでしょうか？」

声に出すまでもなく、そう思っただけで顔を真っ赤に

染める少女がひとり。
そうして、彼女のかけがえのない一日がまた始まったのだった。

2

「……ね、とづくに気付いてるんでしょ。あなたに必要なのは、あの娘じゃなくて私だって。いえ、そもそもあの娘は必要どころか」

家を出てしばらく、いつものように、長い間そうやってきたように、おもしろおかしく世間話をしながらここまで歩いてきた。もう少しで学校も見えてくる。

ふとした拍子で何気なく途切れた会話の後に続いたのは、決して笑えるような話ではなかった。

彼女の声調が高い天上から深い海の底へと潜る。いつも明るい彼女の声が暗く沈むとき、それは真に深刻な話をする合図である。

「……わざわざ言うまでもないことよね。私は会話をしたいわけじゃないの。これは忠告よ、紅軌。あの娘を捨てなさい。二回もやったなら十分でしょ？」

……何驚いてるの。それくらいわかるわよ、バカ。最初のときは気付いてないフリをしてあげただけ。伊達に長い間一緒にいるわけじゃないもの。

ああでも、私が選んだ選択肢は幼なじみとしては失格だったわね。最初のときに嫌われるのを覚悟であなたを責めるべきだった。貶すべきだった。“あなたは最低のクズよ、この変態。女の容をしてれば何でもいいのね”って。この問題は、そうやって止める勇氣と、失う覚悟がなかった私の責任でもあるわ。全てがあなたの罪なわけじゃない。

……バカ、こんなときにまで他人に気を遣ってどうするの。ホント、大バカ。ああもう、なんかバカバカしくなってきたわね。知らないわ、あなたなんて。

でも、やっぱりこれだけはちゃんと覚えておかないと。形としての確証がなければ、いざという時にあなたが躊躇してしまうもの。いい、しっかりと記憶しておきなさい。こんなこと、もう何回も言う気はないわ。いいわね。あなたが幸福を嫉まさないのなら

「私を抱いて、紅軌」

答えは出ない。そう簡単には出ないだろう。

(いや、出したくないだけか)

結局、自分是不器用なだけの人間だ。

それが学校からの帰路で紅軌が行き着いた、たったひとつの些細な結論だった。

「今日のはお口に合いませんか？」

難しい顔をして夕食の箸を進めていた紅軌に、エトの不安げな声が掛かる。

気付いてエトの顔を見てみると、その赤い瞳は今にも大粒の涙を零しそうなほど大きく揺れていた。

「あ、いや。いつも通りおいしいよ。ありがとう」

慌てて笑顔を取り繕う少年。少女の強張った表情も少し和らぐ。

「ならどうしたんですか？ 帰ってきてからずっと暗い顔してますけど……」

「ああ、例の操作の授業のことでちょっとね。なかなか克服できないんだよ」

そう言つて、やれやれと大げさに肩をすくめてみせた。その様子によく安堵したエトが会話を続ける。その顔にはほんの少しの悪戯っぽさも混ざっている。

「ふふ。頑張るのは結構ですが、学園会計のブックリストに載らないよう注意してくださいね」

「いやいや、分校とは言えあの名門校に名を残せるっていうんなら、多少の恥なんて気にならないね。アルフォンスやサミュエル、友幸らと並んで燦然と輝くオレの名前。どう？」

「恥ずかしくて町内を歩けなくなりませぬ」

「一瞬お互いの動きが止まり、すぐにどちらからともなく笑い声を漏らす。」

そこには偽らざる幸せがあった。

ひとしきり笑い合った後、紅軌が学校であったことをつらつらと話し、それにエトが相槌を打つ、そんな会話がしばらく続いた。もちろん食事の時間は延びる一方で、料理もそのほとんどが冷めてしまつが、それでも初めの頃より遙かにおいしく、楽しい時間を過ごせていた。

異変が起こつたのは、珍しく紅軌が食後の紅茶を淹れようと席を立つ、まさにそのときのことだった。

最初、エトの目から見てそれは、紅軌が何かに躓いたように映っていた。ふとした気の緩みでつんのめり、転んでしまったのだろう、と。

だが己が主を助け起こそうと席を立つて彼に近寄つた時、いかに自分が甘い認識をしていたのかを痛感した。

確かに紅軌は倒れていた。しかしそれは偶然の産物ではなく、明らかに何らかの必然性をもって生じた出来事だった。

なぜなら少年はすぐに立ち上がるでもなく、そればかりか四肢をぴくりとも動かさず、ただただ青白い顔で苦しそうに浅い呼吸を繰り返しているだけだったのだから

「……ご主人、様……？」

消え入りそうな声で呟く。小さな声ではあったが、この距離で耳に届かないということはないだろう。

しかし紅軌から返事らしい返事は聞こえない。ただ背

中が小刻みに上下しているだけ。

「ご、ご主人様っ!!」

慌てて傍に寄り、膝をつく。その畳んだ両膝に少年の頭を乗せ、何度も何度も呼びかけた。普段底知れぬ活力を宿している黒瞳も、今は瞼の内に閉じ込められている。

「ご主人様、ご主人様! 大丈夫ですか、ご主人様?!」

こんな様子で倒れ込んでいて大丈夫ということはないだろうが、突然の事態に混乱したエトにそんなところまで気が回るはずもない。とにかく紅軌からの反応を得ることが最優先だった。

そうやってなら事態の好転なく数分が経過したところ、ようやく少年の目がゆっくりと開かれた。まだ顔色も悪いままだが、その体には生気が戻り始めていた。

「……何もないところでコケるなんて、うっかりさんにも程があるよな、オレ」

そんな軽口に乗れるほど、今のエトに余裕はなかった。「どうしたんですかっ?!」どこか具合が? それともどこが悪いかもわかりませんか?」

矢継ぎ早に質問を重ねる。

そんな半狂乱の少女をできる限り安心させようと、少年は努めて笑顔を見せようとしている。だがその目だけはなかなか言うことを聞かず、なぜか哀しい光が宿るばかりだった。

「疲れただけだよ、たぶん。もう体も動かし」

そう言つて上半身をゆっくりと起こした。

当人でないエトにはむろん知り得ぬことだったが、実はこれだけの動作を行うにも相当の気力を必要としていた。

ゆっくり起きたわけではなく、ゆっくりとしか体を動かせなかったのである。

「本当に大丈夫、なんですか……?」

なおも心配そうに自分の顔を覗き込む赤い瞳。その泣き出しそうな双眸を見れば見るほど、そんな態度しかとれないエトを、少年はどんどん疎ましく感じてしまう。

嬉しいくせに。泣きたいくせに。感謝して行くせに。そんな望んだ通りの反応を、望んでいたわけじゃない。つた。

もうだめだな。そう思った。

(選べる選択肢なんて、初めからなかったんだ)

哀しくはない。哀しいなんて感情、忘れなくちゃならない。

「大丈夫大丈夫。でもやつぱ少しは休もうかな。ベッドまで付き添ってくれるかい?」

紅軌は少女の目をしっかりと見据えて、そう訊ねた。

「は、はい……。じゃああの、しっかりと肩に掴まっついてくださいな」

小柄な従者に、半ば覆い被さるような格好で寝室への

通路を歩きながら、少年は一つの決意をする。状況を見ればあまりにも遅すぎる決断だったが、それでももう少し、あともう少しだけ、と甘える声はまだ心のどこかに残っている。それでも、決めた以上はもう振り向かない。ごく限られた選択肢の内の一つであつても、選んだ以上は貫くのだ。例えばそれが自分を支えている少女を裏切る行為でも。

彼八非情ノ道ヲ選ブ。

「それじゃ、先にお休みになつていてください。夕食の後片付けや洗濯なんかは、それなりに時間がかかりますからね。私なら部屋が真っ暗でも問題ないですし」

そういつて布団を掛けるエト。

しかし、枕元に置いてある照明のスイッチを掴もうとする彼女の細い腕を、横から掴む腕があつた。むろん紅軌の腕である。

今しかない。それが彼の手を動かした、たった一つの行動原理だつた。

「ご主人様？」

エトが不思議そうな顔で少年の表情を窺う。紅軌の瞳には真摯な光が宿っていた。その怖いくらい真剣なまなざしとごく短い言葉で、彼は自分の意思を明確に伝える。「しよつ」

紅軌がこんな状態じゃなかったら。少しでもふざけた

様子だつたら。エトの胸の内の不安が全て掻き消えていたら。エトは悪ふざけだと思つて撥ね付け、機嫌を損ねていただろう。

だが、それらの仮定のどれか一つでさえ、今この時この場所この二人の間に存在せず、現実はまだ一つの結果を導く。

エトが口に出したのは一言だけ。

「そんなお体です、一回だけですよ」

小さな肢体が引き寄せられる。少年は胸に抱いた恋人の体温を感じ、真っ白な首筋に口づけをした。そして薄く染まりつつある耳許にそつと呟く。

充分だよ、と。

熱が伝わり、音が重なり、夜が更けていく。

隣で眠っている少女の髪を撫でる。まるでそうあるように造られたような、滑らかで至上の触感。最初触れたとき、とても人間の髪の毛とは思えなかつた。結局、最後に触れたときの感想も同じになつた。

真っ白な頬に触れる。抓つてもねじれないほど柔らかでつるつるな肌。赤ちゃんの肌かと思つた。まあある意味ではその通りなわけだが。

顔を近づける。どんな夢を見ているのだろう？ その

寝顔はとても安らかだった。

薄桃色の唇に最後のキスをした。最初にしたときの味は思い出せない。思考回路がストップして脳みそが休止状態を決め込んでいたからだ。せつかく最後の口づけだったのに、今度もやっぱり味はわからない。なんでかな。

「ありがとう」

心の底からそう言えた。今まで生きてきた中で一番気持ちのこもった感謝の言葉だった。そして最も自然に出てきた言葉でもあった。

直接は言えない。でも言っておかなくやいけない言葉がある。自分の心への誓いだから。何があっても譲れない、大事なモノだったから。

「さようなら、エト」

少女の頬に雫が落ちた。

そして、別れの朝が来る。

前の日と同じような朝を迎えた。

そう、ほとんど同じように、またエトは寝坊をした。

「……なぜ」

もはや疑問形にすらなっていない、空虚なつぶやき。

昨晩はきちんと目覚ましを掛けた。間違いないと掛けた。

「それなのに」

時計が示す時刻は八時過ぎ。そして哀しいかな、今度は時計の不具合ではない。何せ少女の見たる前で直されたのだから。ついでに電池交換も済ませた。まさに完璧。「と、とにかくご主人様を」

そう言葉にしてみてもようやく気が付いた。

隣に少年がいない。

昨日少年が眠っていた箇所に手を沿わせてみると、まだ少しぬくもりが残っていた。一緒に寝ていたことは確からしい。

不思議に思いこそしたが、いつまでもこうやって呆けているわけにもいかない。さっと着替えてから、エトは寝室を後にしたのだった。

「すみませんご主人様！ また私、寝坊しちゃいました！」

リビングのテーブルに少年の制服姿を認めたエトは、安堵すると同時に、申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまふ。

そんな心中を知ってか知らずか、話しかけられた少年は軽くエトを一瞥し、またすぐに視線を元の場所に戻した。彼の前には空になった一人分の食器が並べられている。

「……ご主人様？」

そんな主の素っ気ない態度に疑問を感じ、近寄りつつ

もう一度呼びかける。

聞こえていないはずがないのだが、少年は特に応える風もなく、黙ってティーカップに口をつけている。

エトは恐る恐る声を掛け、紅軌の顔を覗き込む。

「あの、やつぱり怒ってます？」

赤い目と黒い目が見つめる。

そして、すぐに少女は異変を感じ取った。温かいとか冷たいとかいった話ではなく、少年の瞳は、ただただ空っぽだった。意思が読み取れないというより、意思自体が存在しないような、そんな透明だった。

エトが動揺を口にするより早く、少年は「別に」と顔を逸らした。

心地の悪い沈黙が流れる。いや、それを心地が悪いと感じていたのは一方のみだったようだが。

そんな空気に響いたのが、場違いに明るいチャイムの音だった。

紅軌は時間を確認し、隣の椅子に立て掛けてあった学生靴を手取る。そしてそのままエトに声を掛けるでもなく黙って玄関へと向かってしまう。

理由なく、ただただ取り残されないよう少年の後を追う白髪の少女。その足取りは重く、拙い。

玄関にはいつも通り瑤が待っていた。

「おはよう、瑤さん」

その清々しく明るい声に小さな体がびくつと震える。

おかしい。今までがおかしかったのに、ここだけいつも通りなんて、それこそおかしいなこと。

背後のエトの動揺を気にするでもなく、さらに紅軌は言葉を続ける。

その声は楽しげに明るく、不安なんて欠片も感じられない温かな響きだった。

「瑤さんの綺麗な姿を見ると、ああ、今日も一日が始まるんだなあって気になるよ」

そんな少年の一言に、二人の少女の心が大きく揺れ動く。気持ちがざわつく。

黒髪の少女はじつと二人の姿を見比べた。

片方はいつも通り、いやいつも以上に明るく穏やか。

もう片方の瞳は不安げに揺れ動き、その体はさらに小さく縮こまって見える。まるで産み親に捨てられた子猫のよう。

その様子でもう、瑤は全ての事情を察した。自分とるべき態度も、作るべき表情も、全部。

エトの耳に、ほんの微かに「そう……」という囁きが聞こえたような気がした。

「相変わらずうまいわね、紅軌。でも、お世辞でもそういうことストレートに言ってくれると、嫌いじゃないわ」

そんなことを楽しげに話す少女の顔には、満面の笑みが浮かんでいる。相手に対して何の疑いも持っていない、

そんな心からの信頼に満ちたやさしい相貌。

その幸せそうな顔を見て、エトの心はさらに大きく揺さぶられる。周りの音がどんどんどんどん遠くなる。

「じゃ、行こうか」

いつの間にか靴を履き終えていた紅軌が玄関のドアノブを握る。空いている方の腕に、まるでそうすることが当然のように絡まる瑶の腕。

どこからどう見ても、二人の姿は互いを想い合う恋人のそれだった。

「彼氏借りてくねえー、エトちゃん」

のんきな声でそんな言葉を残し、二人の姿はドアの向こうへ消えていった。

まるで銀河の果てのような、遙か遠く。

エトはその場に立ち尽くす。前に進むことも後ろに戻ることもせず。何も考えず考えられず。

ただただ呆然とそこに立ち尽くしていた。

紅軌が選び、瑶が従つ。

エトは 取り残された。

その日一日、エトは自分が何をしていたのかよく覚えていない。

気付けば普段紅軌が帰宅する時間になっていて、慌てて夕食の準備をし始める。

それでも、料理に集中することはできなかった。心ここにあらずの彼女の手は、普段絶対しないようなミスを連発し、いつもならできて当然のことをこなせない。

そうこうしているうちに、玄関のドアが開く音がした。続いてこちらに向かう足音。

エトはつい手を止めてリビングの入り口を注視する。まもなく、そこから少年の姿が現れた。

少しの安堵と、大きな不安。少年が身に纏っているのは、朝と変わらない寒々しい気配だった。

それでもエトは努めて明るく、いつもそうしていたように元気な声を掛ける。

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

にこにこ明るく作られた笑顔を一瞥し、低い声で紅軌は相槌を打った。

そんな態度にも（表面上は）めげずにエトはさらに言葉が続ける。

「すぐに夕食用意できますから、テーブルに腰掛けていただくさいね」

その声に素直に従い、席に着く紅軌。

その様子を見て少女は、ついつい安堵のため息をつきたくなった。

声はきちんと届いている。届く距離に少年はいる。

ほんの僅かだけ軽くなった心で、エトは食器に料理を盛り付けていく。

ものの数分で食卓には数種類のおかずが並べられた。どれも紅軌の好物ばかりである。

「それでは、いただきます」

エプロンを外したエトが手を合わせる。それに合わせて紅軌も手を合わせ、おかずに箸を伸ばす。その様子を、少女はじつと眺めていた。

肉じゃがを摘んで口に運ぶ。ぴくりと眉が動いた。

少女は黙って感想を待つが、なかなか紅軌の口は開かない。

ようやく咀嚼し終えると、そのまま玄米、御浸し、煮魚と、数々の料理を一口ずつ食す。

そして残りのスープが嚙下されるのを見て、ついに耐え切れずエトが声を掛けた。

「あの、どう、ですか？」

不安げに揺れる真紅の瞳を見つめるのは、やはり感情を映し出さない空虚な黒瞳。

「まずい」

短くはつきりと少年の言葉が響く。婉曲も感傷もなく、ただ淡々と紡がれた言の葉。

その言葉が耳に入り、意味を理解し、ようやくエトが何か取り繕おうと口を開いたところで、

「瑶さんのところで食べてくる」

そう言って紅軌はさっさと席を立つてしまった。

慌てて少女も立ち上がって声を荒げた。

「ま、待ってください！ ご主人様っ!!」

出した本人さえ驚くほど大きく響いた声に、ゆっくりと振り返る少年。

しかしその目に見つめられた瞬間、エトの心は凍り付いてしまった。

そこに宿っていたのは空っぽで透明な光などではなく、はつきりとした嫌悪の感情だったから。少女に向けられた少年の、その瞳が映し出した久しぶりの心の色は、彼女が最も見たくない暗い闇色をしていた。

固まったエトから視線を切り、紅軌は静かに部屋を出て行った。

それから数日、少女の小さな体と心は空回りし続けた。

少年の気を引くための様々な行動は悉く正反対の状況を作り出し、エトと少年の心をますます遠ざけていく。

そして二人の距離が離れば離れるほど、それと反比例するように近づいていく紅軌と瑶。

もうかつての恋人の場所にいるのは自分ではない。エトはそう思い始めていた。

原因なんてわからない。自分に責があるのかもしれない、紅軌に何らかの心境の変化があった可能性だって

ある。原因はわからないのだ。彼が話してくれないのだから。

それでも現実には厳しく、そして明快だ。少年と自分との間には大きな溝が生まれ、もともと近い関係だった瑶との距離は縮まった。

それが今の全てだった。

静かな夕食を終えたりビングに、チャイムの音が鳴り響いた。紅茶を飲んでいた紅軌が、読んでいた雑誌をテーブルに置き、席を立つ。そして上着を羽織って玄関へ。洗い物をしていたエトが、気になってリビングの扉からこっそりと玄関の方を窺う。

そこには、制服姿でさえ一目を惹く魅力的な体型を、セーラーカラーのワンピースで無駄なく包み込んでいる瑶の姿があった。服の色は漆黒。それがまるで、長身の彼女に合わせて仕立てられたように、着ている人間の美しさを際立たせる。

つついといエトは、状況も忘れてその容姿に見入ってしまった。よく見れば、普段あまり化粧をしないその顔に、ごく薄くメイクがなされている。

「早かったかしら？」

「いや、いい時間だったよ」

そう言いながら、紅軌は瑶の唇を奪った。瑶の目が嬉

しそうに細まる。逆に、覗き見ているエトの目は極限まで見開かれた。

そうしていたのはほんの数秒だっただろうか。お互い顔を離す。

「せつかちね」

「ごめん、その姿に耐えられそうもなくて」

紅軌が頬を掻きながら照れる。

「その、とつても似合ってる。綺麗だよ」

今度は瑶のほうとその唇に唇を重ねる。一瞬だけの軽い口づけ。

「ありがと」

やや後ろに下がってお礼を口にする少女。

二人の周りを、やわらかな空気が包み込む。

誰もその空間には割り込めないように。

「あ、ごめん、忘れ物。先に出てくれるかい？」

「わかった。あんまりレディを待たせないでね」

冗談めかしてそう言い、ドアを開ける瑶。

そして紅軌がリビングに戻ってくる。エトは慌てて身を引こうとするが、錯乱しているせいで勢い余ってその場に尻餅をついてしまう。

へたり込んだ少女の前で、隙間が大きくなるドア。

明らかに不自然な少女の姿だったが、紅軌は軽く一瞥

しただけで、足を止めることもなく奥の自室へと向かってしまう。

がさごそと奥の部屋から物音がして、まもなく少年が出てきた。手には小さな紙袋。そのままエトに声を掛けるでもなくリビングを出ようとする。

待って！

そんな言葉を出す代わりに、少女は紅軌の服の裾を掴んでいた。

「……何？」

心底不機嫌そうな声で訊ねる紅軌。

小さな彼女には、恐ろしくてとても目を合わせられない。

フローリングの床に視線を落とすまま呟く。

「……瑶さんのこと、好きなんですか？」

「ああ」

答える声は淀みなく淡泊。

「私よりも、ですか」

「わざわざ訊かなくても、自分でわかってるんじゃないか」

「……。……これから、どちらへ？」

「さあ。どこかな」

会話はそれきり。

服を引く力が弱くなったのを感じて、少年はリビングから玄関に向かう。エトは俯いたまま。

「ご主人様、私、私は」

その弱々しく悲痛な叫びは、玄関のドアが閉まる硬質

な音に掻き消された。

その場所にいることを、彼女はひどく後悔した。

なぜ二人の跡をつけてきてしまったのか。こんな光景を目にすると知っていたら、絶対について来なかったのに。

頭の中で自分の浅はかな行動を幾重にも責め立てる少女の視線の先で、紅軌と瑶が仲良く腕を組んで建物に入っていく。

そこはホテルだった。

3

虚ろな瞳で、エトは目の前の遊具を見つめる。

そのブランコの下で、彼女と少年は出会った。

親に捨てられ、食い逸れ、絶望し切っていた彼女を救ったのは、まだ顔に幼さを残した中学生くらいの男の子だった。消え逝く命を助けてもらったのだ、その命を彼のために使おうと考えて、一体何がいけない。

少年と共に遊び、食事し、憩っていた時もずっと思い続けていた。この人の役に立ちたい、この人のために在りたい。狂おしいほど一途に、そう願っていた。

あるお月見の夜。何の間違いか、彼女は人の容を手に

入れた。

原因なんてどうでもよかった。

これであの人と一緒にいられる。彼のために生きていける。これ以上の幸福がどこにあるだろうか。

いや、実はあった。しかも割と最近に。それは泣きそうな痛みと引き換えに得られた大切なモノ。愛されることがこんなに痛くて、切なくて、嬉しいものなのだと初めて実感した。思わず涙を零してしまった。彼は自分の行いを心底悔いていたようだけど、そんなことは思っただけでなく、彼女は痛みではなく、悦びで泣いていたのだから。

公園に雨が降る。二人が出会った公園に、涙が降る。

冷たい冷たい雨のなか、ずぶ濡れで冷え切った体から、そこだけ温かな雫が流れる。

それは人の姿をしたネコの、真に人間だった証に他ならない。

その公園から、紅軌の家の灯りが見える。今の姿になるまで、エトが毎晩のように見ていた光だった。じっと目に焼き付けてきた景色。むろん、雨に烟る今のような姿も記憶に残っている。

電気が点いているということは、彼が家にいるということ。

とつくにエトがないことに気付いている頃だろう。

彼は探してくれるだろうか。こんな雨のなか、どこにいるのかもわからない自分を、探しに来てくれるだろうか。

いや、来ない。きっと。

なぜなら彼には、もう自分以外に大切な女性ひとができたから。自分と違いスタイル抜群、明るく、彼をリードできる彼女。それでいて気遣いも忘れない。自分には永遠のようにさえ感じられる長い時の中で、彼と共に生きてきたのだ。自分が出来ないことも簡単にやっつけてのけてしまっだろう。あんな理想的な女性なんて、そうそういるものではない。

何より彼女は人間だ。彼だって、こんな紛い物の容をもった化け猫なんかより、ずっとよく思うに決まっている。最近の彼の態度がその証拠だ。

相手に必要とされたくてその姿になった者が、必要と思われなくなったらどうなる？ 必要でないと、自分が決めてしまったらどうなる？

答えは、もうまもなく出るような気がした。

そしてエトは、ヒトの姿をもって初めて、独りきりの夜を過ごした。

明け方に雨は上がっていた。
そろそろ彼が学校に行く時間だと、一年間の生活の中で身に付けた感覚が告げる。

エトは、一晩同じ姿勢で居続けて強張った体を揺する。乾くわけもなくびしょ濡れで、重く沈む服。

それでも気にせず彼女は立ち上がった。向かう先はもろろ紅軌の家。他に行くべき場所もない。

沈んだ気持ちを引き摺って、彼女は泥だらけの地面を歩き出す。

それを見た瞬間、エトの冷たい体の中に電撃が走った。紅軌が、家の前で誰かを待つように扉に背を預けていた。遠目からでもそれとわかるくらい、やつれて見える。

よくよく見てみれば、背を預けているというより、扉に体全体でしがみ付いているようにも見える。

不謹慎だと頭では十分に理解しているながら、それでもその姿に期待を抱いてしまう少女。

自分のせいで、自分のために、彼はあんな姿になっ
てるんじゃない！

途端、勢いよく足を踏み出す。早く彼の許に向かつて、その胸に抱きつきたい。ごめんなさいって大声で謝りたい。

だがしかし。その足は数歩と行かずピタリと止まってしまう。

彼に寄って行ったのは自分ではなく、向かいの家から出てきた長身の女性。

瑠だった。

心配げに声を掛ける少女。その声に反応し、俯き加減の顔を持ち上げた少年。大丈夫と穏やかに、それでもやはり苦しそうに笑い、安心させるように少女の唇を奪つ。

時計の秒針が一周するくらいの時間、二人はそのままキスを続けた。

ようやく離れた二つの唇に、透明な橋が掛かっている。慌ててハンカチでお互いの口を拭う瑠。その様子に苦笑味の紅軌。しかしその顔には、さっきより明らかに

気が満ちている。

ときはきとした動作で家の鍵を閉めた紅軌の腕を取り、瑠はもう一度彼とキスをした。再びの長い口づけ。

そして二人は、腕を組んで学校へと向かう。遠く離れた場所に立つエトには見向きもしない。

そのまま、朝の光の中に消えてゆく男女の後姿を見つめ続けることしか、少女にはできない。

その表情に驚愕や失望といった色はなく、ただ笑顔が浮かんでいる。

ぼろぼろと零れ落ちる大粒の涙で彩られた、そんな笑顔が。

エト。それはどこかの言語で“小さいもの”を意味する言葉。何かしらの手段で少年が引つ張り出してきた、彼女のためだけの名前。この世界で彼女が生きる証。

さつき閉じられたばかりの鍵を再び開ける。その鍵は、彼が彼女の努力と意志を認め、信頼の形として少女に手渡したもの。

玄関で靴を脱ぐ。初めのころ、ついつい土足で家に入りこんでしまったときは大目玉だった。半べそをかきながらごしごしと一生懸命床を拭いたことを、まるで昨日のこのように思い出せる。考えてみれば、メイドたる自分が初めてやった掃除がそのときだったとは、何とも皮肉なことである。

そしてもう一つ。ここは主人を送り、迎える、大事な場所でもあった。ほんの気の迷いで、紅軌と瑠が一緒に登校することに拗ねたこともある。二人とも困った顔で笑っていたが、あのときの瑠がどことなく強張った顔をしたことを、エトは見逃さなかった。誰にも言わなかったし、これからも言うつもりはない。

【必要であろうとした者が、その不要を悟ったとき】

洗濯場で濡れた服を脱ぎ、しつかり水を切ってから洗

濯機の中へ。一瞬お風呂に入るうかとも考えたが、やっぱりやめておいた。お風呂場でのハブニングの数々はあまり思い出したくない。ただ一つ言っておくとすれば、やはり自分はネコだった、ということくらいか。

バスタオルを体に巻き、家の二階へ。部屋の入室に入り、カーテンは閉めたままで窓を開ける。カーテンが風に舞う。こんな格好で外には出られない。いじけた時、拗ねた時はいつも屋根に上った。そうして、紅軌が上ってくるのをじつと待ち続ける。喧嘩して、仲直りするのはいつもこの屋根だったから、エトは密かに“とりもちの屋根”と名づけていた。

【つまり、存在の意義を失ったとき。元々不安定な存在が、その根源を失った先に待つもの。それは】

リビング はひとまず置いておき、先に二人の寝室へ。光差し込むこの部屋で、二人の一日は始まり、そして終える。一年間その繰り返しだった。一緒のベッドの中で、いつも壁の方に体を向けて眠っていた少年が、いつの頃からかこちらを向いてくれるようになった。そんなに昔の話ではなかったはずだが。

クローゼットから一着、自分の服を取り出す。紅軌からプレゼントされた大切な服。それは装飾や派手さとい

つたものよりも、機能性と合理性に主眼を置いてデザインされた質素な服だった。悪く言えば可愛げがない、とも言える。それでもその服は一番のお気に入りだった。贈られてからほとんど毎日、これを着て家事をしていた気がする。そうそう本物のメイド服なんて手に入らないが、自分にとってこの服は、立派にその機能を果たした大切なメイド服に違いない。こうやって袖を通すたびに、がんばろう、とやる気に満ちてくる。

そしてリビング。食事し、語り、笑い、泣き、喜び合った場所。紅軌の舌を満足させるような料理を作れるまでに掛かった月数は、おそらく片手指では足りないだろう。それでも、紅軌の喜ぶ顔見たさに努力を重ねた日々を苦しめたことは一度もなかった。それは新妻だけに許された特権だと、瑤に苦笑交じりに説明された。

二人だけの食卓に、寂しさの入り込む余地などまるでなかった。会話があっても沈黙であつても、穏やかな空気が壊れることはない。そういう場所だった。

この家で二人は暮らし、生きてきた。
悔いることなど、ありえない。

【消滅。奇跡の解消】

テーブルに腰掛け、寝室から持って来た日記帳を置く。最後のページを開き、じつと白紙を見つめ続ける。

一分ほど見続け、ようやく一息つく。

よかった、濡れてない。ようやく涙が止まってくれたようだ。せつかくの伝言がおしゃかになつてしまつたら、それこそ泣くに泣けない。

誓いは、ここに残すのだから。

紙の上にさらさらとシャープペンを走らせる。

伝えたいことはいろいろあるが、とてもじゃないが全部書き切れるはずもない。だから、ここには一言だけ。

今想っていることが、そのまま届くような一言を。

すぐに書き終わり、しげしげと眺める。

と、ポツリポツリと水滴が垂れてきた。大急ぎで日記帳を遠ざける。また涙。

「と、とと、危ない危ない。間一髪でした」

彼女は笑い声を漏らす。少なくとも本人は、自分が笑顔で笑っているつもりだった。

目の前にかざした右手が薄くなる。比喻でもなんでもなく、本当に向こう側が透けるように淡い色彩になつていく。見れば、右手だけでなく、彼女の体全体が薄くなつていく。

消えかけていくカラダ。

「私がいなくても大丈夫ですよ。私よりずっと頼りになる瑤さんがいるんですから」

儂さの幻影。

「だから、メイドさんは雇わないでくださいね。これは私だけの特権なんですから」

笑い声が彼方へと吸い込まれていく。

「さようならです、ご主人様。あなたの傍にいられて、私は本当に幸せ者でした。……そう、本当に。ずつとずつと想い続けてたこと、何度伝えたかわからないこの言葉、最後にもう一度だけ言いますね……」

その言葉は手紙。

「
、
」

そうして、そのヒトは消え去った。

彼女の最後の手紙は届いただろうか。

「いつでも呼んでください」

日記帳の最後のページには、そう書かれている。

残念ながらそれを見たのは少女であって、少年ではない。少年はしゃがみこんだまま、テーパーの支柱にもたれかかっていた。呼吸が浅い。

「不自然に散らかった衣服。これがあなたの望んだ結果？」

「……まあ、ね。わざわざ突き放したかいはがある」

「そして彼女は、紅軌のその姿を見ることなくここを去れた、と」

息も絶え絶えに言葉を紡ぐ少年の姿。彼を大切に思っている人間が見て平静でいられるとは思えない。

「誰だって大切なひとが苦しむのは見たくないものだよ。今わの際なんて特に、ね」

「……なによそれ。私へのあてつけ？」

「まさか」

そう言つて笑みを浮かべる。だが今の彼の状態では、無理しているのを曝け出すだけの行為だった。

「性的接触による力の譲渡。こんなこと、素人でも知ってる基礎中の基礎よね？」

「……」

「なのにあなたは一線を越えてしまった。そんなにあの娘を愛していたの？」

少年が答ええないのは呼吸に必死なせいか、それとも。

「愚問よね、今さら。いいわ、そんなこと。そんなに余裕もないし、さっさと本題に入るわ。」

今からあなたを侵すわね。口腔接触だけじゃもうその体はもたないもの」

そう言つて少女はしゃがみ込み、少年の投げ出された脚の上に膝をついて跨る。胸をせわしなく動かし、呼吸するのちやつとの少年に、抵抗らしい抵抗ができるとは思えない。

「……しないよ。瑶さんは、そんなことしない」

だがたつたそれだけの言葉で、少女の動きはぴたりと止まってしまふ。俯き、その赤い唇を血の出そうなくらい噛み締める。

「……すぐにでも剥がされて侵されるこんな状況で、なんでそんなこと言えるのよ……」

「瑶さん、だから」

もう一度、ゆっくりと繰り返す。

「相手が、瑶さんだから」

「うるさいうるさい、ほんつとにうるさい！ もう黙つて、そんなに私を信じないでっ！！ 私をお淑やかで清楚なお嬢様だとも思ってるの？！ 死にかけの男子を侵すくらい簡単につ」

少年のワイシャツが強引に握り締められる。ボタンがいくつかが弾かれる。

「簡単に、出来るん、だか、らあ」

しかしそれ以上の凶行には及べず、それどころかゆつくりと少年の胸元に顔を押し付ける。濡れたワイシャツで覆われて表情は窺えないが、その小刻みに震える両肩が、心情を雄弁に語っていた。

「私だって、ただのひとりの女、なのよ……」

消え入りそうな声で呟く。少年はただただ沈黙を保つのみ。

「……わかってるわよ。こんなことしても紅軌が喜ばないことくらい。それでも私は、あなたに死んでほしくない。本当に、死んでほしくないの……」

少年は何も答えない。その言葉を肯定しても否定しても、少女の心を傷つけるだけ。

「……ねえ、なんであの娘を遠ざけてしまったの？ そんなに愛しているなら、彼女を手放すべきじゃなかった。私を抱いてさえいれば、二人とも幸せなままの生活をずっと続けられたのに」

「……瑶さんは、オレがそんな器用に立ち回れると思う？」

「……あー。はは、無理ね。うん、絶対無理。ふふ、そんなことできるわけないわね」

少女が声を殺して笑う。ほんの少しだけ、彼女にいつもの明るさが戻る。

「瑶さん」

「何？」

「オレたちの分も、素敵な生活を送って。いや、毎日がバラ色に輝いてなくなっちゃっていいんだ。ささやかな幸せが感じられる日々を、未永く続けて。退屈するぐらい長く、楽しく」

「……あは、何よ。何よそれ。そしてあなたたちは天国で永遠に幸せに過ごしているっていうの」

少年はゆつくりと首を振る。動作にまったく生気が感じられない。終末の時はすぐそこまできていた。

「いや、それは無理だよ。だってエトはまだ死んでない。彼女はここではないどこかで生き続けていくんだから」

「あなたの幸福を願いつつ、ずっと希望もなく、独りぼっちで……」

胸元で震えていた少女の震え方が変わっていた。少年の胸に、肌のぬくもりとは違う温かさが染みしてくる。

「……瑶さん、泣いてる？」

「泣いてないわよ。零れてるのは私の涙じゃなくて、あなたたち二人の涙だもの。私は泣いてなんかいない……」
少年の掌が少女の頭に置かれる。人の手とは思えないほど冷たかったが、それでも暖かかった。

「ありがとう」

その言葉は、誰に宛てた手紙だったのか。まもなく。少年の手が力なく滑り落ちていった。